

漢語の造語システムを再考

－ 外国人が見た学習用の分類法

Sheddy N.Tjandra

Abstract

Japanese makes a dichotomy in dividing learners of Japanese language. One is the learners from Chinese character's society and the other is the learners from non-Chinese character's society. The Indonesian Japanese learners are from the non-Chinese character's society.

Japanese expert Yoshiaki Takebe pointed out that studying Japanese kanji (Chinese characters) is not a problem for the learners from a Chinese character's society but it is not so for the others. Therefore, he says that it is very important to make a special method in teaching kanji for them. The teaching method must be based upon a consumption having values of simplicity, rational, and systematic consideration. The learning method is the same.

I have taught a learning method to Indonesian students in lectures of Japanese language and linguistics. There was a good result but it is still not enough, therefore in accordance to this teaching experience and a study by Japanese expert Yoshiyuki Morita, I intend to make a new learning method to help Indonesian students in studying Japanese kanji.

The new method classifies the words of Japanese kanji into 7 categories; (1) Words from arbitrary process (2) Words from modification process (3) Words from objectization process (4) Words from clause formation process (5) Words from arbitrary combination process (6) Words from synonym-antonym process (7) Words from affixation process.

(Key words: kanji, learning, method, non-Chinese, society.)

はじめに

漢字は中国語の文字で日本語はそれを借用して日本語の表記上の表意文字として使用している。漢字からできた語を漢語という。日本人は、この日本語を学習する外国人のことを漢字系と非漢字系の二つに分類した。漢字文化圏以外の外国人は漢字を知らないのが当たり前のことだと思っている。知らないから、それを学習するのが簡単になるはずがない。

日本人の専門家、武部良明氏は、現代の言語学は西洋から来ている学問で、西洋人の言語は漢字のような表意文字を使用していないので、文字の問題に興味を持たず言語学の一部に取り入れないと、指摘している。もちろん研究もしないわけだ。しないから、効果もない。そのために、言語学は日本語を学習する非漢字系の人々の漢字と漢語の学習には役に立たない。

問題点

日本語の漢字・漢語の学習は、漢字系の人にとってぜんぜん問題にならないが、非漢字系の人なら大変苦勞する。彼らに特別な教え方を適用する必要があると、武部良明は言った。

日本人は西洋人と違って漢字の取り入れに歴史があるので、大昔から国語学などで漢字の研究に力を入れていた。だから、漢字を学習する非漢字系の外国人は日本人の研究成果を適用することができる。それ以外、自ら研究をして自分にふさわしい教え方や学習方法を見つけるほか方法がないと思う。インドネシア人は非漢字系のグループに属する。

本稿ではインドネシア人（非漢字系）向きの漢語の学習（漢字ではない）に基づく漢語の分類法（漢語の学習法）を論ずることにする。

先行研究

語の種類、分類、造語システムなどの研究をしてきた日本人の学者が大勢いる。漢語だけではなく、和語、外来語の研究もある。そのうち、鈴木重幸(1972)は日本語の語彙を単純語、派生語、複合語、合成語に分類した。この分類を取り入れる他の学者は西尾寅弥(1976)、信太知子(1983)の諸氏である。中に一番大切なのは森田良行(1989)で、森田は日本語の漢字・漢語の確認をしてその分類をした。

(1) 森田良行の漢字・漢語の分類法

森田はまず漢字の造語を字数からの確認をした。氏は次のように言っている。

「1文字で使用される漢字（これを1字漢語という）は「印、運、金、会、本・・・」

など数はそう多くない。漢字は表語文字であるから、1文字が和語の1語に相当する。

一方、2文字漢語の熟語は、意味の面から見れば、二つの和語を組み合わせたものに当たるわけである。

1文字漢語は単純語（1字語）に相当し、熟語は複合語（2字語以上のもの）に相当する。」(1989: 71,72,86)

森田は、また1字漢語の単純語は読み方から言えば、音読みのものであると、指摘した。

漢字の熟語について、森田は基本的に、ある基準を設けて六つのグループに分けた。

1) 主述の関係

熟語の前の字が表す意味をA、後ろの字が表す意味をBとしたとき、Aが主語でBが述語となる関係。

例：地震、日没

（地が震える，日が没するという関係）

2) 修飾の関係

AがBを修飾する関係。

例：造花、近所、最古。

造が動詞、近が形容詞、後ろの名詞を修飾する。最が副詞、後ろの形容詞を修飾する。

3) 並列の関係

AとBが対等の関係で並んでいる熟語である。

この関係にさらに次の三つの関係がある。

反義の関係 例：大小、売買。

類義の関係 例：道路、巨大。

同義の関係 例：年々、黙々。

4) 補足の関係

動詞的成分のAと名詞的成分のBとの組み合わせで意味の中心はAにあり、Bがその対象（目的語に相当する）を表している熟語。

さらに次の三つの関係がある。

BをAとする関係 例：読書、求人。

BにAする関係 例：登山、帰国。

BがAする関係 例：落雷、絶命。

(人を求める、国に帰る、命が絶える、などの関係。)

5) 認定の関係

AまたはBの一方に対して、どのような状態であるか判断を他方（BまたはA）で下す関係の熟語である。

さらに次の三つの関係がある。

Bに認定判断があり、副詞的意味を添える。

例：整然、急性。

Aに打ち消しの意があり、Bを否定する。

例：不正、未知。

Bの判定をAで下す肯定判断。

例：有害、当然。

6) 3文字以上の熟語の省略

漢語は2文字による省略形式を造りやすい。

例：特急 (特別急行)

国連 (国際連合)

さらに3文字熟語と4文字熟語について、森田は次のような確認をした。

3文字熟語については次の確認をした。

1) 漢字が1字下について意味を添える。

例：専門家、必需品。

2) 「性、的、化」などの接尾語を下に付けて副詞的意味を添える。

例：社交性、印象的、近代化。

3) 漢字が1字上について意味を添える。

例：大自然、再確認。

4) 「不、無、非、未」など否定の判断を下す漢字が上についたもの。

例：不合理、無責任、非公式、未完成。

5) 3字の漢字がそれぞれ対等に重ねられたもの。

例：大中小、松竹梅。

4字熟語については次のような確認がある。

1) 2字の熟語を二つ重ねて造られたもの。

例：常用漢字、気象情報。

2) 数字が使われているもの。

例：一石二鳥、千差万別。

3) 反義の関係

上の2字と下の2字が反対の意味で一对になっているもの。

例：弱肉強食、異口同音。

4) 二重の反義の関係

例：老若男女、喜怒哀楽。

5) 類義の関係

例：自由自在、適材適所。

6) 主述の関係

例：意味深長、危機一髪。

7) 連続の関係

例：取捨選択、前代未聞。

以上のように、森田氏は立派な漢語の造語の分類をしている。

(2) 武部良明の考え方

日本語の漢字・漢語の学習について、非漢字系の外国人にとって、二重の難しさがある。最初は表意文字・表語文字の漢字自体の学習で、その次は漢字からできた漢語の学習である。これについて、日本人の専門家、武部良明の考え方を見逃すわけにはいかない。

武部氏は、次のように言っている。

「新出する漢字というのは、学習者にとって大きな負担である。その場合に一つ一つ筆順の指導から始めたのでは、いくら時間があっても足りないのであり、それは過保護ということにもなる。教師として必要な仕事は、学習者の学習の手助けをすることであり、自学自習できる基礎を作ることである。」（1991年：155頁）

要するに、武部の考え方では、漢字を一つ一つ全部教える必要がないということである。

さらに、武部は次のように言っている。

「漢字というのが文字ではなく、図形だということ。一つ一つの漢字が意味を持っていて、その意味が字体と密接に関連している。漢字を組み合わせた漢字表記語の意味が、個々の漢字の意味の複合である。これらの事柄は、いずれも、学習者の知的な興味を引くに足りるだけの内容を持っている。学習者としては、未習の漢字、未習の漢字表記語についても、類推力を働かせ、その意味を理解することができる。学習者が漢字に親しみを持つように仕向けるのも、入門課程の教師の役目である。」（1991年：155頁）

武部の考え方では、結局、漢字と漢語の学習が関連していて、なんらかの関係で合理的で体系的な学習の方法が必要だと強調するわけである。暗記法についてはぜんぜん言及していない。漢語の学習には特に次のように言っている。

「漢語の学習に当たっては、漢字の意味を通して習得するのが効果的だ。漢字の意味を通して習得するのでなければ、知的な日本語は習得できない。漢語の意味は、それを組み立てる漢字の意味と関連させ、それによって記憶の中に定着させるのが効果的だ。」（1991年：282頁）

このように、漢語の学習は漢字から切り離すことができないということだけではなく、漢語の学習法は漢字の意味から考え出す必要があると、武部ははっきり述べている。

現在の研究

（1）理論的基盤— 簡潔・合理・体系的の3原則

本研究の理論的基盤は漢字教育専門家の武部良明氏(1991)の考え方を適用する。武部氏によると、漢語の学習法は漢字教育上から由来するものでなければならない。それは簡潔性がある、合理的で体系的な原則に従うものである。

最初は、武部は、2原則の合理・体系的な原理の考え方から出発した学習法が必要だと、説いた。しかし、同氏が説いた説明から見ると、簡潔性が必要だという原理も伺われる。結局、全部で3原理になるということである。要するに、漢字・漢語の学習は暗記法を避けるべきだというのが氏の考え方にある。

まず、合理的という原則は、何らかの合理的な手段、例えば文法上の特徴を手がかりにして対象物を覚えていくということで、学習者にその合理的な手段を納得してもらって対象物を脳内で整理して、記憶に入れるという計算である。つまり、方法ではない暗記法を避けられるわけだ。

次は、体系的という原則は、合理的な手段の効果により覚えた対象物をその他の合理的な手がかりと一緒に合理の網の中で秩序よく記憶に残すというものである。この体系的な合理の網のおかげで覚えた対象物を忘れることなく、記憶に残すという計算である。もちろんこれも暗記法が通らない方法である。

最後は、簡潔性があるという原則は、考え出した分類法が複雑なものではなく、学習者の学習意欲を損なわない最低限のもので、これ以上の分類をすれば学習者に嫌われて、意欲をなくす可能性があるという計算である。要するに、学習者の学習心理を理解することが必要でそれを尊重して学習者を励ますということが効果的だと思う。

(2) 前回の学習法とその体験記

2.1 前回の学習法

1990年代の初めから 1995年まで、そして2000年代の初めから 2005年までの10年間ぐらい私は日本語と日本語学の授業の中で次のような学習法をインドネシアの学生に教えたことがある。この学習法というのは漢語を覚えるための分類法であった。手元に残る授業ノートと記憶にあるものを頼りにして次のように報告をしておきたい。

この学習法では、漢語を字数から分類した。それは、単純語、結合単語、合成語の3種類だった。

(1) 単純語

単純語というのは音読みの漢字1字からできた漢語のことである。

例: 「会」(かい)、「門」(もん)。

明日の会には出席できません。

そこに竜宮の門があります。

漢字1字の語、訓読みなら漢語ではなく、和語になる。

例: 「車」(くるま)。

(2) 結合単語

結合単語というのは一つの単語になっていて切り離すことができない漢字2字からできた単純語相当の漢字の熟語である。さらに意味の面から進んでこれを(A)複合意味の熟語(B)単一化意味の熟語との2分類であった。

(A) 複合意味の結合単語

この熟語の意味はそれを構成する漢字2字(または3字)の意味の複合である。

例: 校長、大小、自動車。

(B) 単一化意味の結合単語

この熟語の意味はそれを構成する類義の漢字2字の中の1字の意味である。

例: 道路、巨大。

(3) 合成語

合成語というのは二つの結合単語からできた漢字の熟語で、字数から言うと、4字以上上の漢字の熟語である。

例: 高速道路、結合単語「高速」と「道路」からできたのだ。

自動車工場、結合単語「自動車」と「工場」からできたものである。

2.2 体験記の中の問題点

以上の分類法を教えるときにいろいろな問題点が出た。それは次のものであった。

(1) 辞書的意味と文法的意味の漢字1字の意味を分けなかった。そのために、学習者に迷惑をかけたことがある。

例：大会社の「大」(辞書的意味)と不合理の「不」(文法的意味)の違い。

「車」と「的」の意味の違い。

(2) 結合単語にはいろいろな問題点があった。その中に学習者からの質問もあった。

a) 漢字2字の熟語には字順によって、指示物(意味)が違うものもあるし、同じものもある。

それらをどのようにして識別できるのかという学習者からの質問があった。私は答えられなかった。

例：「会社」と「社会」、違う指示物。

「祖先」と「先祖」、同じ指示物。

b) 以上の2字は反復して単語を作ることができるが、別の2字は反復して単語を作ることができない。できるものとできないものとを、どのようにして識別できるのか。

例：「会社」と「社会」、「祖先」と「先祖」、これはできるもの。

「道路」と「高山」、これはできないものである。

「路道」と「山高」という単語はない。

c) 類義字の結合単語は字順を変えることができないほかに、反義字の結合単語も同じことである。

例：「道路」は「路道」になることができない。

「大小」も「小大」になることができない。

d) ほかの分類法がまだあるのか。

(3) 合成語を構成する要素、結合単語は、語順が決まっていてそれを反復することができない。それはなぜなのか。

例：「高速道路」は、「道路高速」になることができない。

「自動車工場」は、「工場自動車」になることができない。

(4) 字数から言うと、6字以上の合成語はどういうことなのか。

例：「東京外国語大学附属日本語学校」、

「全国盲老人福祉施設連絡協議会」。

以上などの問題があった。中に学習者からの質問もあった。これで、もう一度調べる必要があると、感じたわけである。

(3)字数からの漢語の新分類法

漢語は漢字1字1字から作られた言葉なので、その正体をまず構成素の漢字の数から見なければいけないと思う。この場合の漢字の数というと、構成素の数という意味もある。構成素と漢字の数から言うと、日本語の漢語は、(1)単純語(2)結合単語(3)合成語

(4)コンチヌームの4クラスに分けることができる。これ以上分ける必要がない。また、これより以下だったら、全体の問題を覆うことができない。

1) 単純語

単純語というのは漢字1字からできた単語で、この漢字が音読みで辞書的意味を含んでいる字である。訓読みの漢字は和語になるが、文法的意味の漢字は単語にならない。

例：客、金、例など。

今客がいる。

この指輪は金です。

これはいい例ですね。

「金」(かね)は和語で英語のmoneyの意味です。

「的」(てき)は文法的意味で、これ自体単語になることができない。

2) 結合単語

前述したように、結合単語は、一つの単語になっていて切り離すことができない漢字2字(または3字)からできた単純語相当の漢字の熟語である。漢字の読み方は音読みで語の意味は構成素の漢字の意味の複合である。語彙数から言えば、この結合単語の数は全体の漢語の大部分を占める。

例：食事、優良、読書、多少、不良、事務室。

3) 合成語

合成語というのは、前述したように、二つの結合単語からできた漢字の熟語でこの場合、結合単語が構成要素なので、漢字1字同等の単位として数えられる。字数から言うと、この合成語は4字以上になる。そのほか、1字の単純語が3字からできた結合単語とは重複の問題があるので、合成語の計算に入らない。

例：高等学校、日本語学校、大学院事務室。

高等学校の構成素は、「高等」と「学校」；

日本語学校の構成素は、「日本語」と「学校」；

大学院事務室の構成素は、「大学院」と「事務室」である。

このような構成素は、結合単語として合成語の一つの構成単位として見なされる。

4) コンチヌーム

コンチヌームというのは、完成した一つの複合意味を含んでいる単語相当の長い名詞である。コンチヌームは単純コンチヌームと複合コンチヌームの2クラスに分けることができる。単純コンチヌームは最低三つの結合単語からできた長い名詞である。複合コンチヌームは構成素が単純コンチヌームとその他の最低一つの単語からできた長い名詞である。

単純コンチヌームの例：東京外国語大学、
広島大学文学部、
身体障害者運動大会。

構成素：「東京」、「外国語」、「大学」；
「広島」、「大学」、「文学部」；
「身体」、「障害者」、「運動」、「大会」。

複合コンチヌームの例：東京外国語大学附属日本語学校；

広島大学文学部英文学科；

第11回国際身体障害者運動大会。

構成素：「東京外国語大学」、「附属」(結合単語)、「日本語学校」
(合成語)；

「広島大学文学部」、「英文学科」(合成語)；

「第11回」(合成語)、「国際」(結合単語)、「身体障害者運動大会」

(4) 造語システムからの新分類法

漢語の学習用の分類は字数からのものだけでは足りない。文法上などの手段による造語の問題を確認する必要がある。このような造語法を学習用の分類にする。これは森田良行氏の分類(1989)のモデルである。これからの新分類法は森田氏のモデルの考え方に従う。

まず、文法は人間が作ったものなので、誰でもそれを理解する能力を持つ。だから、文法的な特徴のある造語を学習者に納得させれば、学習者はその学習が比較的やりやすくなる。しかし、言葉というのは、すべてが合理的な文法のものではない。恣意的、習慣的な造語のものもある。それ故、合理的に納得できるものではない。恣意的、習慣的なやり方自体が合理的なものではないからだ。この恣意的、習慣的な造語についての対策は暗記法しかない。合理的な考え方から言えば、暗記法はまともな方法ではない。しかし、ほかの方法がないので、この暗記法は他の方法なしの方法になる。これらの特徴を手がかりにして学習用の分類を次の七つにすることができる。

1) 恣意的習慣的プロセスの語

恣意的習慣的プロセスというのは、理性的なわけがない単語の作り方で習慣的に社会の中でみんな共同でそのように使用するという単語の作り方である。この恣意的習慣的プロセスという手段が漢語1字の単語(単純語)を作り上げるわけである。学習上このような単語は暗記法で覚えるほか方法がない。

恣意的習慣的プロセスの単語の例：

印、運、円、恩、菊、金、銀、客、会、芸、県、碁、毒、象、詩、線、茶、点、銅、肉、文、本、幕、門、例。

今の単語の記憶上の手がかり(二つ)：

A) 漢字の読み方は音読みである。訓読みなら、和語になる。

例えば：「金」、漢語：「きん」"gold"の意味；

和語：「かね」"money"の意味になる。

B) 単語の意味は語彙的意味(lexical meaning)である。文法的意味(grammatical meaning) なら、それだけでは、単語ではないので、特定の単語につけて他の単語を作る。

例えば:接頭辞の「不」と接尾辞の「的」は文法的意味で、これだけでは、単語ではない。「平等」、「日本」という単語につけて「不平等」、「日本的」という他の単語を作る。

単語の語彙的意味の用例：

ここに印を押してください。	今日は運がいいです。
日本のお金は円です。	恩を忘れません。
菊の花はきれいです。	金と銀は貴重品です。
客がいるよ。	明日の会には出席できません。
きのういい芸を見ました。	日本の県はいくつですか。
碁のやり方はわかりますか。	この蛇は毒があります。
象は大きい動物です。	日本の詩は難しいです。
ここに線を引いてください。	この地方は茶の産地です。
いい点をもらいました。	これは銅ですか。
肉はきれいです。	この文はおかしいです。
これはいい本ですね。	幕を閉じます。
あれが竜宮の門です。	これはいい例ですね。

2) 修飾プロセスの語

修飾プロセスというのは、修飾関係が機能する単語作りのプロセスである。構成素が二つで、前の構成素が修飾語として働き、後ろの構成素(被修飾語)を修飾する。これで修飾-被修飾という文法的な関係が見られる。これは日本語の統語論上の規定の一つで語彙作りに非常に重要なシンタクチック・ルールになっている。この関係のルールで構成素の語順が決まっていてその順をひっくり返すことができない。つまり、出来上がった単語はその形態が固定的になる。

修飾プロセスが生んだ単語は、結合単語と合成語とコンチヌームの3グループである。これで修飾プロセスは日本語の語彙作りに一番重要な手段になっていて学習者にその文法関係を納得してもらって言葉を覚えていくことができる。この合理的な学習の仕方言葉で言葉を記憶に残しておくわけである。

結合単語の例：

新書、高速、漢語、病院、最新、暴飲、食事。

修飾-被修飾の関係：

5種類の修飾関係があり、形容詞名詞型、名詞名詞型、副詞形容詞型、副詞動詞型、動詞名詞型である。

形容詞の「新」、「高」が名詞の「書」、「速」を修飾する。名詞の「漢」、「病」が他の名詞

の「語」、「院」を修飾する。副詞の「最」が形容詞の「新」を修飾する。副詞の「暴」が動詞の「飲」を修飾する。動詞の「食」が名詞の「事」を修飾する。このために、反復する順：「書新」、「速高」、「語漢」、「院病」、「新最」、「飲暴」、「事食」という単語はありえないのが学習者に納得してもらえる。

合成語の例：

高速道路、運動大会、自動車工場、身体障害者。

この場合、修飾-被修飾関係が構成素の単位、字ではなく、結合単語の単位で計算される。構成素の「高速」、「運動」が構成素の「道路」、「大会」を修飾する。構成素の「自動車」、「身体」が構成素の「工場」、「障害者」を修飾する。(単語の「自動車」、「障害者」は5番と7番を参照)

だから、語順転倒の道路高速、大会運動、工場自動車、障害者身体という語はありえない。

単純コンチヌームの例：

身体障害者運動大会、自動車製造株式会社。

構成素が二つの合成語で、修飾-被修飾関係がその間に見られる。

合成語の「身体障害者」、「自動車製造」が合成語の「運動大会」、「株式会社」を修飾する。だから、語順転倒の運動大会身体障害者と、株式会社自動車製造という語はありえない。

複合コンチヌームの例：

第11回国際身体障害者運動大会、東京外国語大学附属日本語学校、広島大学文学部英文学科。

構成素が結合単語、合成語、単純コンチヌームのいずれも可能である。結合単語を単位にすれば、その数は五・六個以上になる。

構成素：

単純コンチヌーム：身体障害者運動大会、東京外国語大学、広島大学文学部。

合成語：日本語学校、英文学科、第11回。

結合単語：国際、附属。

修飾-被修飾関係：

結合単語の「国際」がコンチヌームの「身体障害者運動大会」を修飾、合成語の「第11回」が「国際身体障害者運動大会」を修飾する。

結合単語の「附属」が合成語の「日本語学校」を修飾、単純コンチヌームの「東京外国語大学」が「附属日本語学校」を修飾する。

単純コンチヌームの「広島大学文学部」が合成語の「英文学科」を修飾する。

これで、短い漢語と長い漢語の区別を学習者に納得してもらって、学習者は、この合理的な語学上の知識を手がかりに言葉を覚えていくわけである。

3) 動作対象化プロセスの語

動作対象化プロセスというのは、動作対象関係を表す単語を作る手段で、構成素の漢

字が二つ、前の字が動詞であり、後ろの字(名詞)がその動詞の目的語か対象語になっている。つまり、動作対象化プロセスは、動詞中心の結合単語を作り上げる。

例: 読書、見物、落雷、登山、帰国。

構成素の前の字は全部動詞である。「読」は「読む」、「見」は「見る」、「落」は「落とす」、「登」は「のぼる」、「帰」は「かえる」という動詞である。

「どくしょ」は「本を読む」、「けんぶつ」は「ものを見る」、「とざん」は「山に登る」、「きこく」は「国に帰る」という意味で、「らくらい」は「神様が雷を落とす」という意味でこれは「雷が落ちる」という意味と類義になる。

4) 短文型化プロセスの語

短文型化プロセスというのは、短い文が単語になるという単語作りの手段である。構成素の漢字が二つ、前の字は名詞で文の主語の機能を果たし、後ろの字は文の述語になる。このために、動作対象化プロセスとは逆になって動詞は全部後ろの字である。

例: 地震、日没、水流。

主語の字は、名詞で、前の字の、「地」は「つち」、「日」は「たいよう」、「水」は「みず」である。述語は後ろの字の、「震」は「ふるえる」、「没」は「ぼつする」、「流」は「ながれる」である。

単語の意味は、「じしん」が「土が震える」、「にちぼつ」が「太陽が没する」、「すいりゅう」が「水が流れる」ということで、このような意味を見ても、それは短い文であることがはっきりしている。

5) 恣意的習慣的結合プロセスの語

この5番のプロセスは1番のプロセスの継続である。1番のプロセスは漢語1字の単語を作り出すのであるが、5番は漢字2字か3字の結合単語を作り上げるのである。

つまり、恣意的習慣的結合プロセスというのは、漢字2字か、3字の組み合わせが何の文法的なルールもなく、他の語学上の合理的な特徴もない、そのままの恣意的習慣的によって作られた漢字の熟語の作成の手段である。

恣意的習慣的結合プロセスによって作られた単語は二つのグループがあって、一つは字順反復可能な語のグループで、もう一つは字順反復不可能な語のグループである。字順反復可能な語というのは、二つの構成素の字が順序を変えることで別の単語を作ることである。出来上がった単語はまた二種類あって、意味が違うもの(違う指示物)と意味が同じもの(同じ指示物)の二つである。

恣意的習慣的結合プロセスの語の例:

字順反復可能な語、違う指示物:

例: 社会と会社、会議と議会、水流と流水。

字順反復可能な語、同じ指示物:

例: 祖先と先祖、転回と回転。

字順反復不可能な語:

例： 自動、自動車、自転車、運転、支出、収入。

字順反復可能な語を見れば、なぜそうなるのかという質問を打ち出すことができない。それは恣意的習慣的結合によって作り上げられた単語だからである。字順反復不可能な語の「自動」という単語を見ても、それは恣意的習慣的結合によって作られた言葉だと分かりやすい。結合単語の「自動車」と「自転車」は、中国語の言葉と比べる必要がある。中国語では、「自動車」を「汽車」、「自転車」を「脚車」という。「汽車」は「白い煙を出す車」、「脚車」は「あしの車」という意味である。日本語の「自動車」は「自ら動く車」（当時の「馬車」に対して）、「自転車」は「自ら回転する車」という意味である。両方とも恣意的習慣的に作られた単語であることは言うまでもない。この場合、中国語が正しいのか、それとも日本語が正しいのかということはないわけである。

6) 類義反義プロセスの語

一般論として言語の言葉は類義（意味が同じか似ている）のものもあるし、反義のものもある。意味論では、類義語と反義語の関係はパラジックマチックなものではあるが、日本語の漢語作りはそれをシntaxマチックな関係に移して単語を作る。つまり、類義反義プロセスというのは構成素としての類義の漢字と反義の漢字を利用して単語を作る手段である。この場合、恣意的習慣的な要素もあるが、意味論上の類義語と反義語は合理的なものだから、誰でもそれを合理的に理解できる。この合理的な要素を表に持ち出して、学習者に納得してもらって、学習者はそれを手がかりに言葉を覚えていくことができる。だけど、恣意的習慣的な要素の漢字の利用はしかたないもので、それを暗記するしかない。

類義反義プロセスの語の例：

類義の構成素の漢字の単語：

例：道路、計算、優良、言語、巨大。

反義の構成素の漢字の単語：

例：大小、多少、売買、善悪。

類義の構成素の結合単語は、類義の漢字の利用が恣意的習慣的であることは分かる。だから、それに対して、意味を除いてなぜその漢字を選択に入れて利用するのかという質問を打ち出すことができない。反義の構成素の結合単語の場合にも同じことが言える。特に反義の単語「売買」は字順を変えて「買売」になれないということも恣意的習慣的な要素の働きのためのものであるからである。他の単語の字順も変えることができない。次のような語はありえない。

「路道」、「算計」、「良優」、「語言」、「大巨」、「小大」、「少多」、「悪善」。

7) 接頭接尾辞化プロセスの語

統語論では、接頭辞と接尾辞というのは、理論的に文法的意味を含んでいる形態素で、語彙作りや文作成に出てきて機能するものである。日本語の漢語作りは接頭辞や接尾辞を利用することがある。この場合に二種類の接頭辞と接尾辞がある。文法的意味と語彙

的意味の接頭辞と接尾辞である。前述したように、接頭辞と接尾辞はもともとは文法的意味のもので、語彙的意味の接頭辞と接尾辞（結合の場所、すなわち語の最初と最後を指すもの）は漢字の場合に限られる。つまり、接頭接尾辞化プロセスというのは接頭辞か接尾辞の漢字を利用して単語を作る手段である。

接頭接尾辞化プロセスの語の例：

文法的意味の接頭辞の漢字：不、非、無、未。

例：「不便」、「不良」、「不信」、「不自然」。
「非常」、「非行」、「非常口」、「非公式」。
「無効」、「無責任」、「無意識」。
「未来」、「未成年」、「未完成」。

語彙的意味の接頭辞化の漢字：大、美、外。

例：「大国」、「大自然」、「大会社」。
「美人」、「美意識」、「美少年」。
「外国」、「外来客」、「外報部」。

文法的意味の接尾辞の漢字：性、的、化。

例：「社交性」、「協調性」、「中性」。
「近代的」、「印象的」、「効果的」。
「近代化」、「合理化」、「機械化」。

語彙的意味の接尾辞化の漢字：車、家、料。

例：「電車」、「馬車」、「自転車」。
「作家」、「漫画家」、「芸術家」。
「授業料」、「宿泊料」、「水道料」。

おわりに

「一石二鳥」という言葉がある。以上のような分析は学習用と教授用の両方に効果があるのか、いまだにまだ分からない。

参考文献

加藤、佐治、森田（1989）、『日本語概説』、おうふう。東京

McClure, William, 2000, *Using Japanese—A Guide to Contemporary Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.

Madubrangti, Diah, 2012, *Indonesian Journal of Japanese Studies*, Center for Japanese Studies, University of Indonesia, Depok.

森田良行（1989）、「語彙-意味」、『日本語概説』 pp. 65-106、おうふう。

西尾寅弥（1976）、「造語法と略語法」、『日本語の語彙と表現』 pp. 27-62、大修館書店。

- 佐伯、山内（1983）、『国語概説』、和泉書院、大阪。
- 鈴木重幸（1972）、『日本語文法形態論』、むぎ書房、東京。
- 鈴木孝夫（1976）、『日本語の語彙と表現』、大修館書店、東京。
- 信太知子（1983）、「語彙」、『国語概説』、pp. 130-165、和泉書院。
- 武部良明（1991）、『文字表記と日本語教育』、凡人社、東京。
- Tjandra,SN, 2004, Ucapan Bahasa Jepang Dalam Kajian Interdisipliner (臨際学の中の日本語の発音), FIB-UI, Depok.
- Tjandra,SN, 2007, Bahasa Jepang—Tata Bunyi, Ortografi, Kosa Kata & Tipologi (日本語の発音、文字、語彙), FIB-UI,Depok.
- Tjandra,SN, 2012, Etimologi Kata Bahasa Jepang (日本語の語源学), *Indonesian Journal of Japanese Studies*, pp 59-80, Univ.of Indonesia.